

國民的英雄の理想化

武蔵高等學校教授
文學博士

高

木

武

無窮の過去から無窮の未來に亘つて流れて行く時間の全き流に比べると、個人の生涯は黃梁一炊の夢よりも、なほ儚いものでありませう。併し、父祖から子孫を通じて代謝して行く血族の傳統は、連綿として繼續し、永世に不滅なることが出来るのであります。隨つて、個人は、極めて短期なる個人的生命と悠久なる血族的生命とを有してゐる譯であります。そして、後者は、實に民族の命脈でありまして、各個人は、始終、これに従屬し、これが繼承に努むるものであります。

かういふ風で、一つの民族は、過去、現在、未來を通じて連絡せる個人の血族的生命の總合にして、根本的にその血肉を同じうしてゐるばかりでなく、同様なる氣候風土の裡に生育し、同様なる境遇を経て、同様に舉動して來てゐるものであるから、自然とその間に、感情思想信仰及び利害の共通性を醸成し、民族の精神組織に同一なる特色と固定せる性情とを帶びしむるものであります。國民性といふも

のは、これを基礎として生成したものと思はれます。

この國民性を組織する精神的要素は、肉體的要素と相待つて、その國民に一種特有なる特徴を附與し、他と紛るべからざる特色を醸成するものでありますから、吾々は、之によつて、容易に英國人、佛國人、獨逸人等いふ一定の國民的特徴性の典型を立つることが出來、従つて、此等の國民に接するときは、直にその國民的特性の典型を腦裏に感得することが出來るのであります。

國民的特性は、その國民が一般に具有するものでありますけれども、その中でも、人格力量が傑出して國民的特性を最もよく發揮し、國民の模範となり、國民の渴仰崇拜の的となつてゐるところの人物があります。之を、私は假りに國民的英雄と申して置きます。

國民的英雄は、縦に之を觀ると、國民精神の結晶と目せられます。國民には、自己の思想感情信仰を通して、自己の崇拜する人物を觀、又それを取扱はうとする傾向があります。それで、若し、その人物に足りないところがあれば、それを補ひ、自己の要求に合ふやうに純化し理想化する傾向があります。そして、かういふ過程には、その人物に對する渴仰讚嘆の情が昂じて、一道の靈光がその間から現はれ、自然と無意識の中に、その人物を理想化するといふこともあるやうでありますけれども、又故意にこれを理想化して、その要求を満足せしむるといふ傾向も著しいのであります。國民的英雄の性格に、傳説

的の要素が加はるとか、神秘の影が宿つてゐたりするのは、かういふ事情によるのであると思ひます。

國民的英雄は、横の方から觀ますと、時代思潮の反映したものと目することも出來ます。時代思潮といふものは、時の流に、一般の思想感情を溶かし込んだものであり、國民性情と相俟つて、國民的英雄に特殊なる風格を附與する要素となつて居ります。

それで、國民的英雄には、個性の活躍もあざやかであるが、國民性、時代性などいふ普遍性も力強くあらはれて、國民や時代の要求する特殊の性情と行動とが高調せられて居り、時代によつて著しく趣を異にして居ります。

平安時代に於ける在原業平は、伊勢物語その他に於いて、著しく傳説化理想化せられてゐますし、光源氏は、架空的に作り出された小説的人物ながら、源氏物語に於いて、理想の人物として描かれ、時人の渴仰羨望の的となつたのである。此等の人物は、餘りに優秀であり、感情的であり、國民的英雄などいふ名稱を附するにはふさはしくないでありますけれども、理想的人物として、當代の人士に渴仰せられてゐる事情は、正に國民的英雄が國民によりて理想化せられるのと趣を同じうして居ります。平安朝時代に於ける理想的人物は、情趣にあこがれて、感情趣味に生きてゐるが、これは、彼等が、優柔文

雅なる時代思潮によつて培はれ、情趣萬能の貴族文化の中に醸成せられたからであります。

然るに、貴族文化が衰へて、武家文化が芽ざし初めた源平時代から、鎌倉時代の初期にかけては、源爲朝、源義平、平重盛、源義經等、吉野時代に於いては、楠木正成、新田義貞等が、國民的英雄の代表者となつて居り、戰國時代から江戸時代にかけては、上杉謙信、武田信玄、織田信長、豊臣秀吉、加藤清正、徳川家康、眞田幸村、宮本武藏、荒木又右衛門、赤穂義士等いふやうな人々を擧げることが出来ませう。

源平時代以後は、武家時代で、武士が幅をきかしたところから、國民的英雄も、武人肌の人物が多いのであります。併し、國民的英雄は、決して武人肌の人とは限らず、大政治家、大宗敎家、大學者、大文學者、大美術家等の中には、この種の人物として擧ぐべきものが甚だ多いのであります。煩を厭ふて、今は一々擧げませぬ。

さて、かういふ人物が傳説化理想化せられる過程といふものは、小説戯曲その他諸種の文献によるとか、演説や講談等により、知らず識らずの中にその性格や言行を純化し英雄化してゐることもあるやうであります。又、故意に腹案して靈化し戯曲化してゐることが多いのであります。今、その代表的の

例として、最も國民的で、理想化の著しい人物を、軍記物語の中から數人ほど選み出し、具體的に少し説明して見ませう。

源爲朝は、事實上、智勇兼備の武將でありますけれども、保元物語に於いては、その性格は、餘程誇大に描かれて、實在の人物よりは著しく理想化せられて居ります。實錄（愚管抄）によれば、新院御所に於ける軍評定には、源爲義が献策したのを藤原頼長が斥けてゐるのでありますが、保元物語に於いては、爲朝が献策したのを頼長が斥けたことに作りかへてあります。戦の幕が切つて落されてからも、戰場は殆ど爲朝の一人舞臺であり、待賢門に於いて敵方の大將となつてゐる兄の義朝と對戦した際にも、義朝の論難を忽ち反駁して一語なからしめ、理に詰められて罵聲を放つてつめ寄つた義朝を、わざ／＼見逃してその命を全うせしめたなど、勇氣もあり才氣もあつて、情愛を兼ね具へた性格が餘程戲曲的に活躍してゐます。それから、白河殿に火がかゝり、味方が總崩れになつてから、再擧を志して没落したが、やがて逮捕せらるゝに當つても、彼は病氣にかゝつて湯治をしてゐる際、不意に敵に襲はれて、搦めとられたこととし、彼の勇名を傷けないやうに仕組んであります。

又物語の古本と目すべき異本には、爲朝が伊豆大島に配流せられたことで終つてゐるが、流布本等に

は、更に、爲朝が鬼島に渡つて、鬼共を征服して威勢を振つたので、その謀叛を恐れて、朝廷から討手を差向けられたが、討手の軍兵が三百餘人も乗つてゐる軍船を、爲朝は大鎗矢を射て一矢に覆し、自ら腹を切つて死んだことにしてあります。

かうして、彼の性格行動は、實在以上に、著しく英雄化せられて居りますが、殊に流布本以下に、鬼島征服や花々しい最期のさまを増補してゐるのは、爲朝が傳説化理想化せられて行く過程を最もあざやかに物語つて居ると思ひます。

なほ、淨瑠璃の鎮西八郎唐土船（紀海音作）、鎮西八郎射往來（春草堂作）、黄表紙の爲朝島廻、爲朝飛島廻、合巻の爲朝一代記（藤壽亭松竹作）、實録物の保元平治鬪争圖繪（穉里籬島作）等には、爲朝の事績を一層傳説化して、面白く書きなしてあるが、曲亭馬琴の讀本、椿説弓張月になると、爲朝の理想化は頂點に達してゐる。即ち、彼の性格風貌は著しく靈性を加へ、その行動云爲が頗る神秘的となり、大島から女護の島、男の島（鬼島）に渡り、更に琉球に渡り、國王の女壻となつて時めき榮えるといふことに仕組んであります。

平治物語に於ける源義平は、保元物語に於ける源爲朝と同じやうに、叙事の中心を支配してゐる立役

者として、著しく理想化せられてゐる。

義平が、官加階を望のまゝに與へんといつた藤原信頼の厚意を一笑に附したこと、

作戦計畫を献策したのを、信頼が斥けたこと、

剛勇無双にして合戦の舞臺を獨占してゐること、

などは、保元物語に於いて、

爲朝が、臨時の除目にて藏人に補せんといつた頼長の厚意を一笑に附したこと、

必勝の計策を献じたのを頼長が斥けたこと、

剽悍無比にして殆ど獨り舞臺で戰場に活動してゐること、

を、そのまゝに襲用して仕組んだものであることは、何人も氣附くところであります。

又、義平が捕へられて斬らるゝに臨み、下手人たる難波六郎を蹴殺さんと大言壯語して死に就き、その怨靈が雷となりて、難波六郎を蹴殺したことにしてゐるのは、義平の性格を傳説化神秘化したものであることはいふまでもありません。

なほ、義平のことは、謠曲の惡源太、石山義平、材木義平、淨瑠璃の惡源太平治合戦（並木周藏、安田蛙桂、淺田一鳥作）、待賢門夜軍（並木宗輔、安田蛙文作）、黄表紙の源平布引瀧（勝川春英畫）等に、

一層空想化せられて、その性格が著しく戯曲的になつて居ります。

平重盛は、智勇兼備の武將であつて、事實上にも立派な人物であつたことは勿論でありますけれども、戦記物語に於いては、特に之を理想化し、國民的英雄として理想的の性格風貌を附與してあります。そして、これは、その父清盛を特に悪しざまに特性化し、兩々相對照して、戯曲的に仕組んだ傾向が著しいのであります。

平治物語に於いて、清盛が熊野へ參詣する途中、六波羅からの早馬が切目の宿で清盛等の一行に追いつき、信賴義朝等が兵亂を起したことを告げたとき、清盛が弱音を吐いて都に歸るのを躊躇したのを、重盛が清盛を説き勸めて早速引返し、都に歸つたことにしてあります。實錄（愚管抄）によりますと、清盛は紀州田邊にて都からの飛脚に接し、變を聞いて直に引返し、而もその時の一行には、基盛宗盛の二子と侍十五人とを具せるに過ぎなかつたが、その地の武人湯淺宗重が急を聞いて三十七騎を具して來り、清盛を勵まし諫め、熊野の湛快が鎧七領に弓矢を添へて贈り越したので、一同は間に合せの武装をと、のへて歸洛の途に上つて居り、重盛は全く一行中には加はつてもゐなかつたのであります。

平家物語に於いて、重盛の子資盛と攝政基房との間に乗合喧嘩が起つた際、清盛が憤慨して武士を教唆し、基房の隨身共の髻を切らしめたのを、重盛がそれを聞いて大いに驚き、早速清盛を諫め、又、之

に關係した武士を叱責し、資盛を戒めて懲らしめの爲、伊勢の國へ逐ひ下したやうにいつてありますが、實錄(玉葉、百鍊抄、愚管抄等)によりますと、實は、重盛が、その子資盛の凌辱せられたことを憤り、その部下を指駈して、基房の隨身等の髻を切らしめてゐるのであります。そして、清盛は、當時福原の別荘にありて、この事件には關係してゐないのであります。それで、重盛がこの事について清盛を諫めるとか、武士を叱責するとか、資盛を戒めて伊勢に逐ひ下すとかいふやうなことは、固よりないのであります。

又、平家討滅の隱謀が露顯した結果、清盛が後日白河法皇を幽し奉らんとしたのを、重盛が諫止したといふ話も有名でありますが、諸記錄(玉葉、顯廣王記、百鍊抄、愚管抄、皇帝紀抄等)によつて按ずると、平家討滅の隱謀に参加した者の中に、法皇の近臣があつたので、清盛は、法皇に對し奉つても、多少の不平はあつたかも知れませんが、當時までは、まだ法皇に對する好意を失つては居りませず、流言飛語の爲に、近臣等が禍の及ばんことを恐れて、院の御所へ出仕しないのを見て、清盛はその怠慢を叱り、近臣等を諭して法皇を庇護せしめてゐます。そして、單に、成親、西光、俊寛、成經、康頼等の主謀者を罰するに留まつてゐます。それで、重盛が清盛を諫めるといふ必要も起らず、又、それに連關して、重盛が兵を召集し、清盛の暴擧を未發に防ぐといふ必要もないのであります。

かういふやうな記事は、平家物語の作者が故意に腹案して、清盛と重盛との性格を、相反せる善惡溫暴の兩様に描寫した適例であります。殊に、重盛が一大事が起つたといつて急に兵を召集したといふ記事の如きは、文中に引いてある支那の幽王褒姒烽火の故事から思ひついた腹案であるといふことは、少し注意して之を讀んだら何人も氣附くところであらうと思ひます。

又、清盛の暴虐が募り、天下の人心も離反し、平家一門の衰亡が近きにあるべきを豫知し、その憂苦に遭はんよりは、死を早めんとて、熊野に參詣して死を祈つたが、權現の納受を得て、歸京後、間もなく病を得て薨去したやうに物語にいつてありますけれども、これも實は作者が故意に腹案したもので、實錄（山槐記、玉葉、愚管抄、帝王編年記、一代要記等）によれば、重盛は、かねて病苦に惱み、到底治すべからざるを知るに及んで、熊野に參詣して後生の安樂を祈念し、旁々暫く保養してゐたが、病勢が昇進するので、熊野から歸つて間もなく死んで居るのであります。死を祈るなどいふことはなかつたのであります。

又、重盛が、病氣に際し、外國の名醫の診察治療を斥けたといふ記事、宋の育王山に献金をしたといふ記事、燈籠の沙汰の記事なども、作者の腹案に成る同様なる記事と目すべきものであります。（玉葉、山槐記、百鍊抄、愚管抄、帝王編年記、異稱日本傳等）

かういふ風で、物語に於いては、清盛は驕慢放恣、暴虐無双にして、天下人心の離反を來し、一門の運命を傾けたことにはありますが、重盛は理智明敏で見識高く、忠孝兩全にして仁徳と賢才とを兼ね具へ、天下の人心を收攬して、一門の衰亡を一手に支へたことにあります。それで、清盛は惡虐無道の横紙破りとし、重盛は純忠至孝、溫厚篤實にして明敏なる君子と相場がさまり、一は國民に指彈せられ、一は國民の渴仰崇拜の的となつてゐるのであります。それで、後世の記録や文學的作物などにも、清盛や重盛には、かういふぐあひに特性化せられた性格が附與せられ、兩者の間に於ける善惡正邪の差別的傾向は、いよ／＼著しくなつて居ります。

謠曲の内府、淨瑠璃の太政入道兵庫の岬(竹田小出雲、竹田庄藏作)、合卷の清盛一代記(烏有散人作)昔語兵庫築島(式亭三馬作)、源平武者鑑(寶田千町作)、清盛榮華の巖島(五柳亭主人作)、實録物の義經勳功記、御伽平家(其磧、自笑作)等には、重盛は清盛と對照せられて、ますます理想化の程度を深めて居ります。

源義經は、源平の争亂に於いて、平家討滅の主動者であり、その活躍の花々しく、勳功の偉大なるに反して、何等酬いらるゝところがないばかりでなく、兄頼朝に忌まれて、遙々奥州に逃れ、悲惨なる最

期を遂げたといふところから、之に對する國民の渴仰同情も特に著しいものがありまして、判官最負といふ言葉までも生じてゐるくらゐであります。

平治物語流布本等の卷末に、牛若丸生立の事を叙してありますが、平家物語に於いては、その生立と終焉とを除き、義經が最も活躍した得意時代だけを叙してあります。そして、俊敏勇敢にして智略に富み、名譽を重んずる性格は、宇治川合戦、鴨越の坂落し、四國渡り、屋島合戦、弓流し、壇浦合戦等の場合に發揮せられて居りますが、人情濃かにして同情の豊かな風貌は、屋島合戦のとき、部下の佐藤嗣信が戦死した場合や、宗盛父子を關東に護送する際、その命乞ひの哀願を容れ、自己の勳功に代へて、父子の命を救はんとつとめた場合に最もよくあらはされて居ります。そして、此等の性格描寫には、重盛の場合に於けるほどの潤色は見られませんけれども、戯曲的に特性化してゐる傾向は、相當に認められます。然るに、義經記には、平家物語に描かれてゐる義經の得意時代を省いて、その數奇なる生立と悲痛なる末路とを主として寫し、讀者の同情を集めることにつとめて居ります。そして、鞍馬天狗傳説、鬼一法眼傳説、碁盤忠信傳説、辨慶立往生傳説をはじめとして、幾多の傳説的要素が豊富に附加せられ、著しく小説化せられてゐますが、これに於いては、義經を不遇なる英雄、數奇なる宿命的御曹子として理想化し、判官最負の基調となつてゐる同情をそゞり立て、居ります。

なほ、謡曲の鞍馬天狗、船辨慶、安宅、正尊、橋辨慶、熊坂、忠信、吉野靜、熊手判官、安達靜、景清、八島、攝待、遠矢、舞の本の未來記、鞍馬出、八島、奈須與一、腰越、堀川夜討、四國落、烏帽子折、清重、富樫、笈さがし、高館、お伽草紙類の小説に、鬼一法眼、靜、橋辨慶、辨慶物語、秀衡入、八島老公物語等があり、平家物語や義經記等に於ける義經の説話を敷衍してゐますが、御曹子島渡りや十二段草子では、平家物語や義經記以外に、更に淨瑠璃姫との情話や、島渡り傳説を附加して、義經の性格をますます傳説化し、國民的英雄理想化の劇的展開の程度を深めて居ります。

その他、浮世草紙類では、義經倭軍談(其磧作)、風流詭平家(自笑作)、義經風流鑑(自笑作)、風流西海碇(自笑、其磧作)、互先碁盤忠信(自笑、其磧作)、青本類では、義經一代記、源家勳功記(南仙笑楚滿人作)、源平合戰記(戀川春町作)、黄表紙では、義經千本櫻、合卷では、伏見常磐(柳亭種彦作)、清盛一代記(烏有散人作)、源平武者鑑(寶田千町作)、源平軍物語(南仙笑楚滿人作)、石橋山義兵白旗(烏有山人作)、賴朝一代記(二世南仙笑楚滿人作)、盛衰記摺鉢無間(墨川亭雪麿作)、勇壯義經記(十返舎一九作)、實録物では、義經勳功記、義經磐石傳(近路行者作)、花實義經記(其磧作)、賴朝三代記、御伽平家(其磧、自笑作)、義經記、賴朝鎌倉實記(自笑、其磧作)、淨瑠璃では、源氏烏帽子折(近松門左衛門作)、伏見常磐昔物語、孕常磐、穠靜胎内招(近松門左衛門作)、凱陣八島(近松門左衛門作)、御所櫻堀川夜討

（文耕堂、三好松洛作）、門出八島（近松門左衛門作）、那須與一西海硯（並木宗輔、並木丈輔作）、弓勢智勇湊（平賀鳩溪作）、新板腰越狀、義經腰越狀（並木宗輔作）、清和源氏十五段（並木宗輔、安田蛙文作）、番場忠太紅梅簾（若竹笛躬、中邑阿契作）、津戸三郎、那須與一竹生島詣、吉野忠信（近松門左衛門作）、右大將鎌倉實記（竹田出雲作）、義經千本櫻（竹田出雲、並木宗輔、三好松洛作）、義經追善女舞、碁盤忠信、十二段等に於いて、種々様々に脚色せられ、理想化せられて、義經の性格は一層複雑に、一層人間味を加へて來てゐる。又、これに附隨して、辨慶、嗣信、忠信、那須與一、常盤、靜などいふ人物も傳説化戯曲化せられて、一層理想的の性格を具有するやうになつてゐるのは申すまでもありません。

次に太平記に於ける楠木正成について少し述べて見ませう。正成は我が國に於ける第一の忠臣で、軍神にも擬せらるゝほどの名將でありますから、太平記にあらはれたるところによりまして、純忠無比であり、義烈鬼神を泣かしむるの概ありて、情誼厚く、識見氣概に富み、沈勇にして戦術に長じ、殆ど神にも近き崇高偉大なる性格を具有してゐます。これは、正成本來の人格に基づいてゐることは勿論であります。また作者がことさらに理想化してゐる點も少くないのであります。それで、太平記にあらはれたる正成は、實際に於けるよりも、一層の靈性を加へ、國民的英雄として殆ど理想的の風格を帯び

て居り、國民のこれに對する渴仰崇拜の痛切なものも當然なことであります。随つて、時代を經るにつれ、様々な記録や作物によりて、その性格は益々理想化の程度を進めて居ります。

謠曲に於いて幽靈楠、大森彦七、湊川、淨瑠璃にて、吉野都女楠(近松門左衛門作)、蘭奢待新田系圖(近松半二、竹田平七、竹本三郎兵衛作)、車還合戰櫻(文耕堂作)、楠昔斷(並木千柳、三好松洛、竹田小出雲作)、楠正成軍法實錄(並木宗輔、安田蛙文作)、碁太平記白石斷、楠湊川合戰、浮世草紙にて、楠軍法鎧櫻(自笑、其碩作)、御伽太平記(其笑、瑞笑作)、黒本にて繪本太平記、黄表紙にて、楠むだ無益委い記(戀川春町作)、楠三代記(勝川春山作)、繪本尊氏勳功記(北尾政美作)、俠太平記向鉢卷(式亭三馬作)太平氣(鶴一齋雀千聲作)、合卷にて、嗚呼忠臣楠子の由來(五柳亭徳舛作)、實錄物にて、楠軍物語、楠廷尉秘鑑、楠正成戰功圖繪、楠公記(山田得翁齋作)、南朝太平記(柳隱子信意作)等は、正成を理想化して、その性格の藝術的展開を促したる主なる作物であります。

私は、國民的英雄の理想化せられてゐる例として、戰記物語の各種類から、代表的の人物を一人乃至二人づつ引出し、その性格發展の具體的説明を試みましたが、かういふ例は、少し目ぼしい人物について見ますと、何れの人物にも見出さるゝ現象であります。そして、かういふ風な性格理想化の傾向は、

國民的英雄として人氣があればあるほど、いよ／＼著しいのであります。

さて、かういふ現象は、前にも申しましたやうに、國民が自己の要求によつて、自己の渴仰崇拜する人物を理想化したものでありまして、それによつて、その人物の性格は國民的となり、理想的となり、その國民の理想と時代の趨向とを表示し、國民の渴仰崇拜の度をいよ／＼高めて、之を善導し、教化して、幾多の國民的英雄の續出を促し、國民の教養上多大なる貢獻を齎してゐるのであります。

純粹に歴史上の立場から、その人物事績を研究する場合には、固より、純正なる史實によつて真相を把握しなければなりません、さうでない場合に於いては、國民によつて理想化された國民的英雄の性格事績は、寧ろそのまゝそれを認め國民的、英雄的として崇拜をするなり、國民的教養の資とするなり、藝術的鑑賞の資とするなりして、それを尊重し、それを利用して、かうしてこそ、そこに無限の興味と意義と價値とが生ずることと思ひます。性格事績の理想化によりて、重盛が實在以上に有徳なる君子人の風格を帯び、義経が智勇才略の卓越した上に人間味の豊かな名將の資格をいよ／＼増加し、正成の善美優越なる才幹人格がますます完備して、理想の域に達してゐるのは誠に結構なことでありまして、これを渴仰し崇拜するところに善美なる國民精神の發動があり、永遠に存續すべき健全なる傳統的生命も宿るであらうと思ひます。